特別推進プロジェクト報告
「沖縄ー伝統的価値のゆらぎと社会問題の現在」

南米への日本移民の定着過程
―沖縄からのアルゼンチン移民に関する覚書

水　谷　史　男

1．はじめに
2．南米移民の経緯と背景
3．日本からアルゼンチンに至る道
4．沖縄からのアルゼンチン移民の生活形成
5．とりあえずのまとめ

1．はじめに

地球規模の交通機関と情報メディアが飛躍的に発達した現代でも、ほとんどの人間が日常的に労働と生活を行なう空間の範囲、定住して暮らす「生活圏」はさほど広くはないはずである。それは電車やバスでせいぜい２時間以内で移動できる数十キロの空間になるだろう。まして、高速の移動手段が少なかった50年前はもっと狭い範囲で暮らす人がほとんどであった。社会学で、「人の移動」を問題にするときは、旅行や移民のような空間移動や労働力移動の他に、時間的な幅をもった社会的な移動が考えられる。社会的な移動とは、長期の時間の経過の中で起こる人々の社会的地位の移動のことを指す。そして拠点的居住空間としての「生活圏」を、個人や集団がさまざまな理由で大きく移動するという現象がしばしば起る。

本稿でとりあげる海外移民も、自分の生まれ育った土地をあるとき離れて、遠く海を渡って外国に新たに「生活圏」を築く試みであり、移動によって当事者の労働と生活は大きな転機を迎える。われわれは、これまで日本国内の労働を媒介とした空間移動としての「出稼ぎ労働」を研究してきた。それは1960年代初から70年代末まで、日本経済の高度成長で繁栄した大都市圏の建設業や製造業の底辺を、農村部の第１次産業に生活の拠点を置いたまま、季節的一時的に都市へ移動しては帰還する大量の労働者が支えている構造として捉えられた。「出稼ぎ労働者」は、みずからの生活を維持し向上させるために都市と農村を往復した。これも空間的移動現象であり、同時に社会移動をともなっていた。当時の日本は経済発展に伴う都市―農村間の賃金をはじめとする経済諸条件の格差が開き、またそれ以外の文化的差異も大きく、空間移動はさまざまな問題を生じていた。

そして、今回われわれが南米移民をとりあげるのは、大きく２つの問題を意識している。それは、日本国内の「出稼ぎ労働」が急速に増大する1960年代後半は、それまで毎年南米に送り込まれていた海外移民が、急速に終息していく時期に重なっていることと、出稼ぎや海外移民を多く出した地域の特徴と、そこからの移民が移動先の土地でどのように定着していったのかが、より長期的な歴史の視野の中でみたときに、繋がってくると考えられる点である。社会学でも、1980年代末からの非正規の外国人労働者の流入を機に、外国人労働者や日系人の出稼ぎに注目が集まり、さまざまな研究が行なわれているが、この外国人労働者問題も、実は国内の出

稼ぎ労働が衰退していく時期に重なり、大きく見ればかつて労働力としての人間の輸出国であった日本が、経済発展を達成する過程で国内労働力を使い尽くし、遂には労働力の輸入国に転じるという長期的な変動の中に位置づけることができる。

このような視点から、まず問題を歴史的に整理する必要があるが、とりあえず本稿では、まず日本からの海外移民の初期の事例をみていくことでその動機と背景を探り、具体的には海外移民や出稼ぎを多数出している沖縄と、南米移民について特色のあるアルゼンチンを対象としてとりあげる。

2．南米移民の経緯と背景

2008年は南米移民100周年の記念の年で、ブラジル、ペルー、ボリビアそしてアルゼンチンなどの現地日系社会では盛大な記念祝典や記念行事が行われた。百周年の基点は1908（明治41）年、日本から南米に移民が集団で渡航した「笠戸丸移民」（移民船第１号の船名からそう呼ばれる）である。

まずはじめに、ごくかいつまんで日系移民の歴史を概観すると、最初の海外集団移民は1885（明治18）年の日本ハワイ労働移民条約締結による「官約移民」にはじまる。このハワイ移民（ハワイは当時、まだアメリカ合衆国ではなかった）が、1898年のアメリカ合併による契約移民禁止法で停止されたため、自由渡航ができたカリフォルニアやカナダに日本からの移民の流れが移った。さらに日露戦争前後から、アメリカ合衆国では急速に増加する低賃金で異文化の日本人移民への排斥が強まり、日露戦争後の不況もあって日本政府は国策として移民を奨励したが、米国は移民を制限していった。既にアメリカは1882年に中国人を対象とした移民制限法を成立させて、非白人移民の門戸をせばめ、最後に残った日本人移民も数次にわたる制限の末に、1924年の割当移民法（排日移民法）で禁止される。南米移民は既に1899年にペルー移民として始まっていたが、第１団は風土病などで倒れた率が数10%に及んだといわれ、まだ本格的には進んでいなかった。

両世界大戦間には、移民でできたアメリカも方針を変え、白人移民も数量的に制限していく。とくに1929年に始まる世界大恐慌下では、ほとんどの国が移民を受け入れる経済的な余裕を失っていた。他方、ファシズム政権であったドイツやイタリアは、労働力や兵力の基盤である人口の減少を阻止するために他国への移民を禁じた。このため、日本からの移民は、19世紀末に国交を結んだ南米に向って契約労働者（ブラジルへのコーヒー農園での労働移民が典型とされ、その多くは永住ではなく出稼ぎを動機としていたとみられる）を送り出すことになるが、やがて日本が植民地化した朝鮮半島、さらに満州への国策による集団での「植民」へと向うことになった。しかし、周知のごとく南洋、東南アジアまで拡大した戦争の結末は、そこへ渡った移民に悲惨な運命をもたらしただけでなく、北米での日系人強制収用などの悲劇を生む。

戦時から敗戦後の占領期にいったん移民渡航が停止した約15年ほどの時期を経て、独立回復による国交正常化によって、再び1950年代後半から政府の移住政策による「計画移民」と、呼び寄せによる「自由移民」の２種類が再開された。敗戦前後の海外在住日本人は北米が41万人、中南米が24万人、満州および中国大陸に36万人といわれる。1945年の終戦時、植民地を含む領土の45%を失い、海外在住者と駐留していた陸海軍人軍属を含む600万人以上の引揚げ帰還者が日本に流入したことから、過剰人口問題を危機とみた日本政府は積極的に移民を募集し、渡航費を貸し付けて「計画移民」を南米に送り込

んだ。これは開拓地への集団移民の形をとり、計画移民は最盛期の1952～1973年で、ブラジルが7123人、パラグアイ5158人、アルゼンチン410人、ドミニカ1316人、ボリビア1604人、合計15,611人を数えた（外務省移住局統計）。

大きくみれば、日系移民や出稼ぎという歴史的事実は、第２次世界大戦以前から戦時の中断を挟んで経済成長期にいたる約80年間のうち、北米そして中国大陸、南洋、樺太、東南アジアに送り出された戦前移民（日本の植民地、占領地への移民は敗戦で帰国することになった）と、主に南米に渡った戦後移民とに分けられる。現在、海外に暮らす日系人と日系社会は、これらの移民とその子孫が形作ったものであり、2004年の数字で海外日系人は世界中で260万人以上、ブラジルの約140万人を筆頭に、アメリカ合衆国約100万人、カナダ6.8万人、アルゼンチン3.2万人、オーストラリア２万人などとなっている（海外日系人協会）。

以下では、この日本人移民のうち、とくに南米への移民の比率が他県と比べて非常に高い沖縄と、ブラジル、ペルー、ボリビアなどとは入植経路を異にするアルゼンチン移民に注目し、いくつかの資料と現地での聴き取り記録をもとに、海外移民あるいは海外出稼ぎの実態について事例を中心に記述することにする。なお、本稿ではおもに戦前移民を中心とする実態をとりあげて考察するため、戦後移民については詳しく触れる余裕がないが、沖縄からの移民という問題を考える上で、戦争の影響、とくに沖縄戦と戦後のアメリカの占領統治が大きな意味をもっていることに注意しておきたい。なぜ沖縄から南米へ渡った人々が多かったのかについては、単に気候風土やそこからくる沖縄人の開放的気質などの説明とは別に、沖縄がもつ日本本土とは異なる歴史的背景が作用していると考えられるからである。これは戦前移民についても、戦争と戦後の沖縄の状況がさまざまな形で影を落としていることを考慮する必要がある。

３．日本からアルゼンチンに至る道

移民には渡航の際の条件等から、大別して「自由移民」と「契約移民」の２種類がある。自由移民は船賃を自分で負担し、単独または家族の少人数で渡航し現地での仕事探しも自分でするもので、契約移民は戦前日本の場合、移民会社が現地の農園や鉱山などと契約し、移民者を募集して移民船を用意し集団で移住するものである。日本からの戦前移民の大部分はこの契約移民だった。ハワイなどの成功者が帰国して「海外雄飛」が評判になり移民が盛んになった日露戦争後には、移民会社が60社もあったという。契約移民は船賃の一部、支度金を支払い一定期間の労働契約を移民会社と結び、現地に行ってから労働条件が厳しくても勝手に辞めることはできないという約束になっていた。移民会社の提供する情報は、行ってみると話が違う場合も多く、言語も通じない土地で、期待に反した劣悪な労働に従事した人々が多かったといわれる。

百年前の1908年に、笠戸丸で南米に渡った日本人（800人あまりであったといわれるが正確な数字は資料によって異なる）の多くは、はじめは太平洋岸のペルーに行く予定だったものが、これを受けもった皇国殖民会社の都合で、神戸から出港した笠戸丸は、太平洋からパナマ運河を通るのではなく、シンガポール、インド洋、ケープタウン経由の西回りでブラジルのサントス港に向うことになった。募集条件は現地のコーヒー農園で家族で働くことであったから、単身者では応募できず、夫婦や家族を偽装して乗り込んだ人もあったという。この航海の記録は乗船していた香山六郎の回想録および彼が編集した『移民四十年史』(1)に詳しいが、それによれ

ば移民の出身地は西日本、とくに沖縄、鹿児島が多数を占めていたという。

サントス到着後、移民たちは予定されたコーヒー園で就労するが、不作で着果が悪いのと初心者の不手際もあり三人家族で九袋取れるはずのコーヒーは一袋半も取れず、第一回の日当は食料や食器の購入費で差し引かれ借金になった。故郷への送金どころか自分たちの生活にも困る事態に直面し、話が違うと移民たちは公使館や通訳に陳情、抗議をするが多くは相手にされず、反感からやがて逃亡する者が増えていった(2)。たとえば、沖縄県人152名を率いてカナン耕地に入った嶺昌通訳は、沖縄での勧誘者が移民の収入を誇大に宣伝し、あまりに現実が違いすぎると抗議のストライキにあい、身の危険を感じて二丁拳銃で武装したという話がある。低賃金では渡航以来の借金を返す見込みが立たないのと、過重な労働に加えて食生活の違いなどから健康を損ねたり、言葉の通じない不自由などが逃亡の原因となったが、移民会社の援助も指導もきわめて不十分であったことがこのような事態を招いたといえよう。

笠戸丸移民のその後は、耕地に着いて半年で契約地を去ったものが430人、さらに１年後の野田通訳官の調査では耕地に留まっていたのが191人であった（『ブラジルにおける日本人発展史・上巻』）。野田は渡航者781人から191人を引いた移民の移動先について「正確な数字を得るわけにはいかないが」と断って以下の報告を掲げている。サンパウロ州内の他耕地40名、サンパウロ市中102名、サントス市中110名、西北鉄道敷設工事人夫120名、リオおよびミナス州にある者38名、アルゼンチン転住160名、死亡６名。

このような状況は、その後も南米移民の記録や回想にしばしば登場するもので、二ヶ月近い航海で地球の裏まで渡った当時の移民は、情報に乏しく、二度と故郷に帰れそうもない環境から、必死の労苦を経験することになった。ここで注意しておきたいのは、移民の多くは資金も教育もない貧困層だったのではなく、出身地において相対的にしかるべき資産や能力を持っていた人々であったと思われることである。それはその後の移民にも共通する。だからこそ、南米で最下層の扱いを受けていた先住民や植民地からの奴隷階層と同様の労働条件と、差別を受ければ誇りを傷つけられてしまったと考えても無理はない。

また、移民と一括されるが、この時期の多くの人たちは永住目的ではなく、日本国内で働くよりはるかに多くの収入を得られ「故郷に錦を飾」れると信じて渡航した「出稼ぎ」意識をもっていて、移民会社の募集勧誘も初期のハワイや北米移民の成功談を宣伝していたから、いっそう現地での失望が大きかったと思われる。日露戦争の戦勝で、日本自体が世界の強国になったという意識も少なからず作用していたはずである。母国に対するノスタルジーや愛国心は、移民一世に共通した心情であると同時に、現地で形成された日系社会の中でも、成功して財貨を貯めて帰国した者、現地で経済的・社会的基盤を築いた者がある一方で、失敗してかろうじて帰国した者、空しく異国で貧しさや病のうちに命を終えた人が少なくなく、終戦時のブラジルでの勝ち組、負け組み紛争のような同胞間の対立や嫉視からトラブルが起きる原因にもなった。

ところで、日本からのブラジルやペルー、あるいはボリビアなどへの移民とアルゼンチン移民には大きな違いがある。戦前戦後を通じて、多くの南米移民は移民会社や政府間の取り決めにもとづく集団的契約移民であり、一定の組織的・制度的システムの中で渡航している（その実態はかなり問題のある内容であったことは上でふれた）が、アルゼンチンについては戦前そ

うしたルートはなく、戦後移民もごく短期間を除いて国策に沿った集団移民はほとんど少数に留まった。正確な記録は乏しいが、初期のアルゼンチンへの日本人移民は、単身あるいは小家族で、ときには非合法な形で入国している例が多い。最近刊行された『アルゼンチン日本人移民史』第一巻戦前編(3)に載っている初期の入国者の例では、1900（明治33）年に日本に回航したアルゼンチンの海軍練習艦サルミエント号に給仕として乗り込んだ16歳と13歳の少年二人が正規移民第一号であるが、政府職員や貿易商人などの渡航はあったものの、本格的な移住者が現れるのは笠戸丸以後である。ただその前後でも、太平洋岸のチリやペルーから歩いてアンデス山脈を越えて入国した例や、ブラジルやボリビアなどの契約地を逃げ出して国境を越えてアルゼンチンに来た人々の記録もある。当時は入国審査や旅券の保持なども潜り抜けることができたようで、不法に移住した日本人が相当数いたと思われるが、もはや確認できない。

先にあげた笠戸丸移民の移動先によればアルゼンチン移住者（160名）がかなりいたことになるが、それはどのような理由だったのだろうか。香山六郎は「ブラジルに向う船中でアルゼンチンの方が有望だとあちらに向う二、三の人に彼らは扇動されていたともきいた。退耕して一時サンパウロに留まった者も先発連中のアルゼンチンをほめたたえた報に接して南下して行った」と書いている。この記述からは、移民たちが過酷なブラジルのコーヒー農園で働くより、アルゼンチンの大きな町に行った方が良い仕事があり、はるかに稼げる、と考えたことが推測される。

こうした背景として、現在の経済大国日本にいるわれわれから考えると、南米諸国は貧困を抱えた発展途上国に見えているが、20世紀はじめのアルゼンチンは明治の日本帝国よりずっと経済的・文化的に先進国であったことを考慮しなければならない。広大な土地と資源に恵まれ、スペインやイタリアから来た植民者が作りあげたアルゼンチンは、第一次世界大戦当時は世界で十位以内に入る富裕国であり、ヨーロッパのカソリック文化を基盤として繁栄し、荒廃するヨーロッパから移り住む白人の国であった。とくに首都ブエノス・アイレスは、19世紀後半には鉄道網が敷かれ電話が普及し、上下水道や美しい都市景観を整備した「南米のパリ」と呼ばれる大都市であった。その豊かさは、人間よりも牛の数が多いという牧畜と広大な農地から産出する農産物が、18世紀以来アフリカからの奴隷や移民で人口が急増した北米やブラジルへの食糧輸出で潤ったことにある。今でもアルゼンチンは食糧自給率が100%を大きく超える農業国だが、第二次世界大戦までの時期は経済恐慌にあえぐアメリカやヨーロッパ諸国に有り余る肉や穀物を売りまくって、高い経済発展を遂げていた。

あまり正確な記述とはいえないが、当時のアルゼンチンの状況を語る話として、牛は殺して皮と油だけを取り、肉は食べきれずに野に捨てていたといわれる。これに目をつけた業者が塩漬けにして輸出したら、大きな利益を生んだ。大農園や企業経営から莫大な利益をあげた当時のブエノス・アイレスの上流階級は、大きな邸宅に住み毎夜豪華なパーティで音楽と踊りを楽しみ、時には客船に乗ってパリやマドリッドに遊びにいく優雅な生活を自慢したといわれる。これはブラジル、ペルーなど他の南米諸国とはかなり異なる特徴であり、人口構成でみてもアルゼンチンは圧倒的に南ヨーロッパ（イタリア系、スペイン系）からの移民である白人人口が大多数を占める国であり、ヨーロッパ系の白人人口は約半数かそれ以下で、先住民（インディオ）との混血、アフリカ系黒人やアジア系移民

の子孫が残りを占めるブラジルやペルーとは大きく異なる(4)。つまり、ラテンアメリカといっても植民地支配と独立後の歴史は同じではなく、先住民との混血を進めて多民族化した国が多いが、アルゼンチンは先住民と混血せず、インディヘナを駆逐するか酷使して山地少数民族に追いやり、白人だけで国家形成した特殊な歴史をもつ国なのである。一言で言えばアルゼンチンの白人にとって、ここはヨーロッパの一部なのである。その意味でも、ブエノス・アイレスという都市は「南米のパリ」だった。

当時のアルゼンチンにどのくらいの日本人がいたかは1914年の国勢調査の数字がある（表１）。これによれば、全部で1,007名のうち83.4%が都市部にいたことになり、とくにブエノスアイレスに集中していたことがわかる。日本人が当時就業していた仕事は、主に「洗染業」（洗濯クリーニング）と「花卉栽培・蔬菜作り」が二大職業といわれている。「洗染業」は都市部でスペイン語が使えなくても仕事があり、必死で働けば店がもてたこと、「花卉栽培・蔬菜作り」も都市の住民相手に畑でできる農業で、日本人に向いていた。さらに、少し言葉ができれば「カフェ店」で働く人も増えていった。カフェはアルゼンチンの町には必ずある生活の場で、とくにブエノス・アイレスには多かったから、皿洗いなど下働きからはじめてやがて店を持つ成功者も現れた。これらの人々が、後続の日本人移民を雇い面倒をみる形で日系社会が形成されていく。

あまりそういう側面ばかりを強調することは社会学的に正確とは言えないが、ラテン民族には昼間の休みを長く取るシエスタという習慣があり、よく引き合いに出される「じゃ、また明日にしよう」という意味のアスタ・マニアナという言葉が示すゆったりと楽しく時間を過ごす

表１　アルゼンチンにおける日本人人口（1914年・大正３年）アルゼンチン第三国勢調査による

管　　轄	都　市			農業地域			合　計		
	男	女	合計	男	女	合計	男	女	合計
首都（ブエノス・アイレス市街）	443	95	539	3	−	3	445	95	542
ブエノス・アイレス州	45	5	50	65	7	72	110	12	122
サンタ・フェ州	74	3	77	41	1	42	115	4	119
コルドバ州	17	−	17	8	1	9	25	1	25
トゥクマン州	17	1	18	8	−	8	25	1	25
メンドサ州	7	2	9	4	1	5	11	3	14
コリエンテス州	3	−	3	−	−	−	3	−	3
エントレ・リオス州	1	−	1	2	2	4	3	2	5
フフイ州	95	26	121	1	−	1	96	25	122
サルタ州	−	−	−	18	−	18	18	−	18
チャコ州	2	−	2	−	−	−	2	−	2
カタマルカ州	−	1	−	−	−	−	−	1	1
サン・フアン州	−	−	−	1	−	1	1	−	1
フォルモサ州	−	−	−	2	−	2	2	−	2
チュブー州	−	−	−	2	−	2	2	−	2
全国合計	705	135	840	155	12	167	860	147	1,007

アルゼンチン日本人移民史編纂委員会『アルゼンチン日本人移民史』第一巻戦前編 p.35より

文化は、今も確かにブエノス・アイレスに残っている。これはこの国が、19世紀から20世紀はじめに味わった豊かな社会の反映だと考えられる。必死に働いてカネを稼ごうと海を渡った日本移民の眼から見れば、雇い主であるアルゼンチン人は仕事も週に三日しかまじめに働かない遊んでばかりの「怠け者」だと思っても無理はなかっただろう。そして移民がこの社会に定着していくにつれ、故郷に仕送りしやがては帰国するという当初の希望が、次第に変質していくひとつの理由であったかもしれない(5)。

4．沖縄からのアルゼンチン移民の生活形成

以下では、沖縄出身のアルゼンチン移民のいくつかの個々の生活史的事例をみていくことで、戦前移民の特徴を考察することにする。

沖縄県出身のアルゼンチン移住者第一号は、1908年の笠戸丸移民で那覇出身の知念政実であったとされる。24歳でブラジルからアルゼンチンに転住し、在亜沖縄県人会の発起人の一人となり、後に沖縄に帰って移民の斡旋をして49歳でなくなったという人物であるが、初期の移民の行動や動機を探る意味で、『アルゼンチンのうちなーんちゅ80年史』(6)を手がかりに、知念政実の軌跡を追ってみよう。

不明な点も多いが「80年史」の記述(7)を総合すると、彼の生涯は以下のような軌跡を辿る。

1884（明治17）年、沖縄那覇市の首里に生まれ、1904年20歳の時、兄とともに「球陽座」という芝居小屋の役者になる。名女形と評判の俳優として活躍するが、海外に行くことを志しハワイ公演に行くといって姿を消す。実は24歳で1908年の笠戸丸に乗船していた。単身では移民の条件に合わないので、ナベという女性（またいとこの間柄であったという）を伴い名前を変え夫婦を偽装？してブラジルに渡ったらしい。到着後すぐに農園を抜け出し、アルゼンチンへ密入国しブエノス・アイレスに辿り着く。子が生まれるが３歳で死亡。実は彼には別のナベという妻があり、生まれたばかりの長男を抱えて沖縄に残って義母と那覇で菓子屋を営んでいたという。４年のうちに仲間４人と共同で、ブエノス市内にカフェ店「ミカド」を出店。これは日本人第一号のカフェ店だった。この頃、ブラジルから転航してきた新垣ウシら19人が、行く当てもなくボカ（ブエノス・アイレスの港湾、タンゴ発祥の地）の波止場でうろうろしているところを、知念が助け面倒を見たという話が残っている。彼はおそらくブエノスでいち早く成功し、地方都市でレストランも経営したという。彼が帰国後、断片的に語った話として伝えられるのが、この当時、日本の小学校の新任教師の月給が30円、アルゼンチンでは月収60円、それをまるまるためたという。アルゼンチンで10年を過ごし、1917（大正６）年に沖縄に帰国。翌年、33歳で東京の専修大学経済学部に入学、この年次男が沖縄で生まれた。1922（大正11）年３月、大学を卒業して那覇に戻り、その後波の上通りに菓子屋を開店。やがて店は妻にまかせ、隣にパウリスタ海外社（移民会社）を開設した。そこは自宅と兼用で、ベッド、洋式トイレ、テーブル、それに皿やフォークを並べ移民希望者にテーブルマナーや西洋の生活様式を教え49歳で亡くなったという。

知念政実の生涯は、初期の南米移民のうち、きわめて成功した事例と考えられるが、『アルゼンチンのうちなーんちゅ80年史』に載っているもう１人の笠戸丸乗船の沖縄人、仲里新忠と比較したとき、移民の定着とその後を見るうえで示唆するものが多い。

仲里新忠という人も、最初の沖縄出身アルゼンチン移民であるが、彼は今帰仁村の生まれで、農林学校卒業後、笠戸丸でブラジルに渡航したのが18歳だったというから、知念とは６歳ほど

の年齢差があることになる。ブラジル上陸後、知念とともにフロレスタ耕地に入るが、間もなくそこを抜け出してアルゼンチンに転住する。1910（明治43）年には、コルドバ市で鉄道工夫、ロサリオ市でお抱え運転手、コリエンテス市で名護出身の山城次郎、武太兄弟らとペンシオン（宿屋）を経営したという。ここで現地の女性と結婚、二女が生まれる。長女マリアは、仲里の実弟が同伴して沖縄に行き、二女ビクトリアは日系二世と結婚した。仲里新忠自身は帰国しようとしたが、太平洋戦争にぶつかってかなわず、1942（昭和17）年寄寓先のアベジャネーダ市で病死した。52歳だった。戦後、遺骨が今帰仁の長女のもとに届けられた。

故郷に錦を飾った成功者知念とは異なり、当初「出稼ぎ」するつもりで船に乗った仲里は結局その後の生涯をアルゼンチンで生きることになった。さらに、少し遅れてやってきた二人の沖縄出身者の記録もみてみよう。アルゼンチン第２の都市コルドバで、苦労を重ねた末、この地で生活の基盤を築き家族をもって日系人社会の形成に大きな足跡を残した玉城福陳と大城吉義である。『アルゼンチンのうちなーんちゅ80年史』に載っている彼らの生涯は、以下のようなものである。

玉城福陳（1900年生まれ、大里村出身）：1918（大正７）年、ブラジルへの契約移民家族の一人として若狭丸で渡航。４年後の1922年にブラジルのマット・グロッソからパラグアイのアスンシオン市を経て、海路ブエノス・アイレスに着く。第１次世界大戦後のブエノス・アイレスは景気が回復し、ヨーロッパからの移民が押しかけ活況を呈していた。玉城はここで２年ぐらい洗染店で見習いをした後、1924年にローマス・サモーラの町で洗染店を開業。２年後にコルドバ市に移って、再び人に使われた後、1930年ようやく自分の店を持つ。彼は豪放な性格で、日系人への義理と人情の面倒見のよさで、コルドバのアルゼンチン人の間でも「ドン・アントニオ」と敬称をつけられるほど有名になった。戦前から戦後にかけて、結核が流行し、日本人の患者が多数入所していた空気の良い奥地に作られたコスキン療養所を援助し、退院した人たちの就職の世話を熱心にしたという。やがて移民してきた日本人の独立資金確保のため、1932年ごろから「模合」（モアイは日本の伝統的な頼母子講と共通する相互扶助的金融の仕組み）をはじめた。コルドバで80歳まで生きて、1980年に亡くなる。こうした活動を賞され日本政府から勲六等旭日賞を授与される。

大城吉義（1905年生まれ、国頭村出身）：沖縄県立農林学校を卒業して、アルゼンチンの農牧業を見る目的で25歳の1930（昭和５）年にサントス丸で渡航。それまでは沖縄で小学校の代用教員を勤めたり、村の林業技手として働き、父が亡くなると後を継いで農業に従事した。家は村一番の農家で、そのまま農業で生きていこうと働いていたが、将来を考え島国の限界を飛び出して、大陸で思う存分農業をやってみようと思い、妻子を置いてひとまず単独でアルゼンチンに渡る。当時は世界恐慌の影響で仕事は見つからなかった。ブエノスではだめだと奥地のコルドバに行き、大里村の玉城福陳に出会い、面識はなかったが彼の店で働くことを誘われ、洗濯店の水洗いで働く。毎日午前六時から午後六時まで洗い場で働いたが、三ヶ月ぐらいで転職を申し出て、カフェ「横浜」の皿洗いになるが、結核にかかってしまう。それから５年間コスキンの療養所で闘病生活をし、その間にスペイン語の勉強に打ち込み、社会復帰を果たす。雑貨店経営を皮切りに、バール（飲食店）、撞球遊技場を経営。コルドバの日本語学校校長、日本人会会長も勤める。戦後は、不動産業、農業、養鶏場などさまざまな仕事を経営して発展

し、その一方で同胞の呼び寄せも二千人を越えたという。政治力を発揮した大城は、コルドバ市の北のはずれに、「アベニーダ・ハポン」（日本大通り）という国道を開通させ、支線に「沖縄通り」「東京通り」と名付けている。俳句をたしなんで「松葉」と号し、邦字新聞「らぷらた報知」の株主でもあった。晩年、自分の養鶏場を処分し「移住史」作成に情熱を燃やしたが、1981年その原稿を沖縄に持って行って完成させたところで、亡くなった。76歳。勲六等旭日賞を受賞。

アルゼンチンの戦前移民については、まだ知られていない事実が多くあると思われるが、上の２人のように日本政府から勲章をもらうような成功者の蔭に、もっと多くの人々が移民として活動し、さまざまな人生があった。成功して帰国した人もある一方で、アルゼンチンに根を下ろして家族を作り、後続の移民の手助けをして日系社会を築いた人々がたくさんいた。中には、空しく病に倒れたり失敗して亡くなった人も少なくないと想像されるが、正確な記録はあまり残っていない(8)。

以下では、彼らに共通する移動の契機に関わる側面をいくつか抽出して、われわれの今後の研究の一里塚としておきたい。

移民が移動先の社会に職と住居を得て、定着していく過程で一般的に経験するいくつかの段階があり、一定のまとまりを維持したエスニック集団を形成する第１段階は、少数の成功者がなんらかのネットワークによる資源を活用して、後続の移民を援助指導する形態がしばしば観察される。そこで、このネットワークという観点から、沖縄移民のアルゼンチンでの定着過程を考えてみたい。

セシリア小那覇の研究によれば、オーストラリアやアメリカへのイタリア移民の研究から導かれたモデルとして、連鎖移民 chain migration という概念があり、それは移民しようとする希望者と既に移民した先行者との情報ネットワークに注目したパターンで類型化するものである。イタリア移民の場合、そのネットワークには４つのタイプがあげられる。第１は家族、親戚で作る連鎖、つまり血縁ネットワーク。第２は同じ地域に住んでいる人々で作られた連鎖、これは村落レベルの同郷者など地縁ネットワークに当たるだろう。第３はさらに広いネットワーク、たとえば雑誌や銀行（あるいは移民会社の募集宣伝）などが媒介する連鎖である。第４は出身学校などの専門分野の連鎖、つまり教育機関などが結ぶ技能や職業上のネットワークである(9)。

沖縄からアルゼンチンに渡った移民の場合を考えると、たとえば最初の笠戸丸移民では国策を背景とした移民会社が募集し用意したルートに応募する形とみられるから、第３の類型に近いと考えられる。しかし、その後の移民は「契約移民」というなかば公的なルートとは別に、「呼び寄せ」移民というルートが開かれる。ただ、戦前の初期の移民は多くが「契約移民」であったから、時間的には「呼び寄せ」移民はかなり遅れて発生している。先にあげた事例では、４人とも血縁、地縁ネットワークはもたずに、現地で自力で仕事を探し、基盤を築いた後に同郷者（沖縄出身者うちなーんちゅ）のネットワークを形成する。また、知念の例にみられるように、成功して帰国した人々によって新たな連鎖が開かれる。

沖縄からの移民の場合に特徴的なのは、「契約移民」を最初の契機としながらも、第一世代の形成した現地日系社会が発展するのにともない、連鎖移民の第１類型である親族ネットワークから第２類型の地縁ネットワークに拡大して、同じ村落から「呼び寄せ」移民が連鎖すること

で、強固な同郷者集団を形成する流れを作ったことである。これはアルゼンチン日系社会において、沖縄出身者の組織である「在亜沖縄県人連合会」(10)が大きな勢力を形成した理由になったと考えられる。さらに、「洗染業」や「花卉・蔬菜業」など日本人が基盤を築いた職業では、同業者組合が作られていった(11)から、第４類型の職域ネットワークも拡大していったと考えられる。だが、こちらは沖縄出身者だけではない「日本人会」的組織なので、それぞれの職域と地域に広がりつつ、「沖縄（うちなーんちゅ）ネットワーク」と「日本人ネットワーク」が重なるとともに、内部に政策的あるいは人的な対立も生み出しやすい。

先にあげた４人の事例は、いずれも第１段階の移民にあたるが、彼らは日本政府や現地政府の公的な援助をほとんど受けることなく、自力でまったく新しい土地で生活基盤を築いていったが、その際大きな力となったのは、同郷者のネットワークを探し出し、相互扶助的な協力関係を組織化していったことだったと考えられる。さらに、ある程度基盤ができた次の段階で、親族や同郷者を呼び寄せ、また現地で家族を形成していくことになるが、この点で、他県の出身者の場合と沖縄出身者とでは数の上での大きな相違があったと思われるが、第２段階の問題は次の課題としておきたい。

５．とりあえずのまとめ

本稿では、沖縄から南米に渡り、アルゼンチンで生活を築いた移民に焦点をあてて、いくつかの初期の移民の事例をとりあげたが、最後にわれわれの考える「移民」と「出稼ぎ」の関係について、簡単な枠組みを提示してとりあえずのまとめとする。

「移民」か「出稼ぎ」かという区別は、故郷を離れる時点では決まっていない。海外移民の場合、出発時の当事者の意識をみる限り、海を越えた新天地に夢を賭け、自分の力を発揮して大きな成果を手にしたらいずれは故郷へ帰るつもりの人々が相当数いたであろうと推測される。知念政実のように、実際10年のアルゼンチン滞在でそれなりの財貨を得て、沖縄に帰った例は「出稼ぎ」ということになる。しかし、移民の圧倒的多数は出発時の意思はともかく、結果的には日本に戻らなかったとすれば「出稼ぎ」ではなく現地に定住して子孫をもった「移民」となる。

いまそれを一国内の移動か国境を越えた移動かという軸と、一定期間を経て帰還する一時的移動か生涯永住する移動かという軸を組み合わせて４つのパターンを図示してみると、図１のようになる。「出稼ぎ」は最終的に故郷に帰る移動であり、一国内でそれを行えば「国内出稼ぎ」であり、国境を越えれば「国際出稼ぎ」となる。意識の上にせよ、実際の結果にせよ、移動先に定住し帰還しなければそれは国内なら「移住」であるが、国境を越えれば「移民」となり、国籍を変更して帰化する場合もこれに含まれる。国境は人為的なものであるから、空間的移動という視点では基本的に共通する側面がある。

もうひとつ、より広範な意味で生活の場を大

図１．出稼ぎと移民の類型

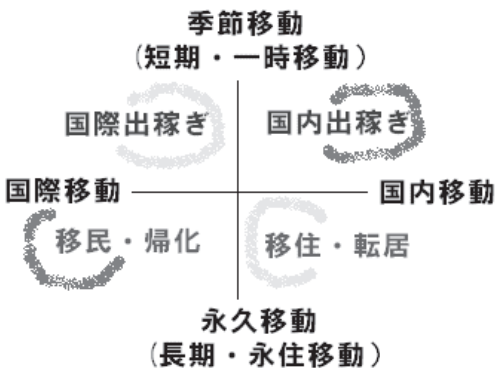
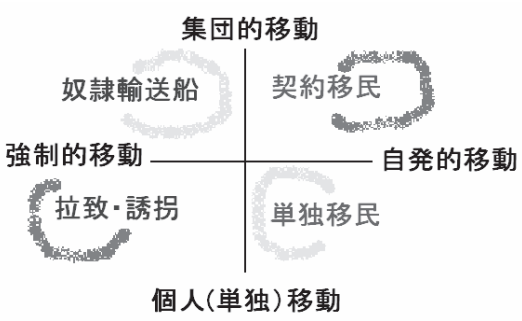


図２．移動の類型



きく変える移動を類型化してみると、図２のようなパターンを考えることができる。これは、個人で移動するか集団で移動するかという移動時の形態による軸と、移動が自分の意志で行われたものか他者の強制によるものかという軸を組み合わせたものである。海外移民の場合、契約移民のように家族単位でしかも多数を同時に運ぶ移民船での移動は、募集に応募して乗り組むという点では集団的・自発的移動になる。しかし、集団で入植した土地を脱出したり、単独で密入国したりする例は個人的・自発的移動になるだろう。また、アフリカ西海岸から強制的暴力によって奴隷として新大陸に運ばれた黒人は、集団的強制的移動と考えられるし、その実態は明らかではない場合が多いが、現代でも発生している単独の拉致・誘拐などは国境を越えて長期にわたれば、個人的強制移動ということもできるだろう。

このような類型が、どこまで実際の移民の分析に適用でき有効かは、まだこれからの問題だが、少なくとも時間的かつ空間的な人の移動を問題とする場合に、「移民」や「出稼ぎ」という現象を、具体的な事実に即しながらも、より大きな視野で考える助けにはなると考える。

われわれの研究はまだ第１段階にあり、これから移民を送出した沖縄の村落での調査や、アルゼンチンでのさらなる追跡調査を計画しているが、とくに移民一世は高齢化しており、また戦後移民については多くの検討すべき課題がある。これまでの日本での移民研究では、戦前の日本の移民政策をしばしば「棄民」政策と呼び、戦後の南米移民についても時間が経つにつれ歴史の彼方に見捨てられつつあると言われてきた。日本が高度経済成長を達成したことで、1980年代には南米との国際関係も大きく変化し、日本企業の進出は現地の日系社会との関係にも影響を与えた。追求すべき課題は多面的で、どこまでできるかわからないほどであるが、とりあえず沖縄について今できることから始めたい。

追記：筆者は2008年２月から３月に、アルゼンチンのブエノス・アイレス市、コルドバ市、ラ・プラタ市などを訪れ、現地の日系人、日本人会、県人会連合および関係機関や大学の方々に会って話す機会を得た。海外最大の日系人人口をもつブラジルほどの大きな規模と力はないものの、日系社会はアルゼンチンに定着し、その中で沖縄出身者の発揮する強力な人的ネットワークや経済的政治的影響力を、この目で見ることができた。移民一世の方々にも何人かお話を聞くことができたが、その過去の苦労と祖国や故郷への熱い想いはひしひしと伝わってくるものがあった。ご協力をいただいた「在亜沖縄県人連合会」の方々、ホルヘ上原会長はじめコルドバ日本人会の方々、国立ラプラタ大学日本研究センターの小那覇セシリア助教授、ラ・プラタ在住の鈴木潤さん、「らぷらた報知社」の高木一臣氏、国際協力機構（JICA）アルゼンチン・ブエノス・アイレス事務所などに、改めて厚く感謝申し上げたい。また、研究休暇を与えていただいた明治学院大学と研究プロジェクトとして援助を受けた社会学部付属研究所にも感謝申し上げる。

最後になるが、今は閉鎖されたコスキン療養

所跡とそこで亡くなった日本人の墓地を、今もそこに住む水溜直さんに案内されて訪れたとき、地球の裏側のこんな美しい場所で結核に倒れて死んでいった人々の思いが偲ばれた。鹿児島県枕崎出身の水溜さんは、コスキンに残る最後の日本人一世だということだが、荒廃してしまう日本人の遺骨を自力で骨を拾い墓を建てて守っている人である。コルドバに戻る１時間半ほどのバスの中で山と湖を眺めながら、筆者の頭には自分が死んだらもうこの墓地を世話する人はいなくなるのでは、と話してくれた水溜さんの明るい顔が浮かんだ。われわれには何ができるのだろう。

【註】

(1) 香山六郎『香山六郎回想録』サンパウロ人文研究所、1976年。香山六郎編『移民四十年史』。

(2) 笠戸丸はブラジルへの第一回移民船として名高いが、実はそれ以前に４回、ハワイ経由でメキシコやペルーに日本人約1600人を運んでいる。これは定住を目指す移民というより、一攫千金を目的に故郷に帰る出稼ぎ型だったといわれる。宇佐美昇三『笠戸丸から見た日本―したたかに生きた船の物語』海文堂、2007年。

(3) Federación de asociaciones Nikkei en la Argentina “Historia del Inmigrante japones en la Argentina”（eapañol）Tomo1-Período de Posguerra. 2005.（日本語版）アルゼンチン日本人移民史編纂委員会『アルゼンチン日本人移民史』（第一巻戦前編、第二巻戦後編）（社）在亜日系人団体連合会、2002年。

(4) 現在の民族構成のデータでは、アルゼンチンは南ヨーロッパ系を中心とする白人が97%、メスチソ（白人と先住民インディヘナの混血）やインディヘナ（ケチュア族、グラアニー族など）は少数民族である。これに対しブラジルは、白人（ポルトガル系が多い）53.7%、白人との混血38.5%、アフリカ系黒人6.2%、アジア系0.4%、先住民は0.4%であり、ペルーは一番多いのがインディヘナ（ケチュア族、アイマラ族）45%、次がメスチソ（白人と先住民の混血）37%、白人は15%に過ぎず、あとはアフリカ系黒人や日系や中国系の人々である。数値は『データブック・オブ・ザ・ワールド2008年版』二宮書店による。

(5) 17歳でブラジルに渡った石井キワ（1893年鹿児島県生まれ、1910年に旅順丸移民としてブラジルに渡り1913年にアルゼンチンに移住）の回想からは、情報もなく若い女性がただ外国へ行ってみたいという動機で渡航したことが語られている。これを読むと、移民の動機には金銭以外の多様な要素があったことがわかる。「日本からは遊びにでも行くような気分で来たんです。両親には止められました。私は小さかったから、考えがなかったんです。そのへんの相撲でも見に行くつもりで来たんです。荷物は着替えだけでした。日本からは洋服を着てきました。私、南米に来ないでもよかったんですけれど、やはり持って生まれた運命ですわね。鹿児島の枕崎はいいところですのに、働きさえすれば食べるに困ることはないのに、どうしてこんなところに来たのかしら。カフェちぎりでブラジルの山の中に二年くらいおりましたよ。よく働いたもんです。ちぎったカフェを大きなザルに入れて、その中のゴミをとったり枯れたカフェを除いたりするんです。きれいにしたカフェを七十キロ入る袋に入れるんです。私は七十キロ入りの袋を一日に十二くらい作りました。そのカフェの袋を出すのは私が一番でした。七十キロの袋を頭にのせて車の通るところまで運ぶんです。私は日本で父の農業を手伝っていましたからいいですが、慣れない人にはきついんですよ。三人して山を逃げてきました。みつかったら連れ戻されます。荷物は持ってこれなかったです。そのまま出て来ました。山からサンパウロまで汽車で一日もかからなかったです。言葉も分からないし、怖かったですよ。サンパウロでは奉公口をみつけて働きました。女中さんの仕事でした。ブラジルからは女三人で来たんです。船に乗ってアルゼンチンに来ましたの。私と宮地イトさん、それと田畑ユクさんの三人です。その船にはお客さんも乗っていました。部屋もちゃんとあてがわれました。ブエノスまで六日間かかりましたかね。

ブエノスに着いてからは、笠戸丸で来なさっ

た人たちがいましたから、そういう人のところへ最初行きました。住んだのはバラッカスのパトリシオス街777番地で、小牧さんたち（笠戸丸移民）もそこに住んでいました。そこには他にも五、六人の人が住んでいましたよ。たいていの人が鹿児島県人でした。石井清水、石井政太郎もいました。でもあの頃の日本人はわずかなもので、そこに三人で部屋を借りて、仕事を探したんです。たいてい奉公の仕事ですね。それは新聞を見て探すんです。奉公も何回か替えました。やはり好かなかったり、月給が安かったりしますから。月給はたいてい35ペソから40ペソでした。私は靴工場にも行きました。給料は月に50ペソくらいだったでしょうな。そこでは一週間に一度もらいますから。給料は工場の方が多いですけど、奉公の方がいいですな。食事が付きますから。バラッカスには五、六ヶ月しかいなかったです。それからはセントロ（中央地区）の方で住み込みで奉公しましたから。」（前掲『アルゼンチン日本人移民史』第一巻戦前編、p.42）

(6) （社）在亜沖縄県人連合会『アルゼンチンのうちなーんちゅ80年史』2004年。

(7) 知念と仲里の生涯は同書、pp.50-56による。

(8) ただ、大城の入院していたコスキンの結核療養所は、広く知られている。海抜700メートルの空気の良い保養地に日本人４人が、1931年に日本人患者の救済のため家を借りて始めた施設で、1935年に在亜日本人会の事業として土地家屋を購入し、男子病棟、女子病棟のある50床の療養所となった。過労と非衛生的な生活環境が結核の温床であり、日本人の多くが就労していた「洗染店」従業員に罹病者が多かったため、アルゼンチン全国から患者が集まった。コルドバの医師アルマンド・シマ博士がここで治療に尽力し、多くの患者を救ったと感謝されているが、その後の新薬で結核が克服され、1960年頃閉鎖。（社）在亜沖縄県人連合会『アルゼンチンのうちなーんちゅ80年史』p.216など。

(9) アルゼンチンの事例としては1914年にアルゼンチンへの移民を奨励した移民研究会というグループが発行した「海外」という月刊雑誌によるものがあった。小那覇セシリア『アルゼンチンの日本人移民の歴史』筑波大学博士論文、1996年、pp.197-198。

(10) （社）在亜沖縄県人連合会は、単に県レベルの「県人会」組織ではなく、沖縄の出身村落単位の出身者の連合組織として成立している。そこでは、沖縄県人であることだけでなく、どの村にルーツをもっているかが重要なファクターとなっている。これは、本土の他の県人会にはみられない特徴である。

(11) 洗濯店の同業者組合は1929年にブエノスアイレスで「在亜日本人染色洗濯同業組合」が設立されている。野菜作りでは1924年に「在亜日本人蔬菜同業組合」が、花作りでは1919年に「在亜農業研究会」、1928年には「在亜日本人園芸会」が設立されている。アルゼンチン日本人移民史編纂委員会『アルゼンチン日本人移民史』（第一巻戦前編、第二巻戦後編）（社）在亜日系人団体連合会、2002年による。

【参考文献】

浅野慎一『世界変動と出稼・移民労働の社会理論』大学教育出版、1993年。

上原清利美『在アルゼンチン日系人録』らぷらた報知社、1968年。

宇佐美昇三『笠戸丸から見た日本―したたかに生きた船の物語』海文堂、2007年。

小那覇セシリア『アルゼンチンの日本人移民の歴史』筑波大学博士論文、1996年。

小那覇セシリア「ブエノスアイレス市における戦前日本人移民の適応過程に関する一考察―1918年の日本領事館の名簿と1930年の日本人会名簿のデータを中心に―」琉球大学法文学部人間科学科紀要『人間科学』1999年９月。

川島裕『海流―最後の移民船『ぶらじる丸』の航跡』海文堂、2005年。

香山六郎『香山六郎回想録』サンパウロ人文研究所、1976年。

（社）在亜沖縄県人連合会『アルゼンチンのうちなーんちゅ80年史』1994年。

（社）日本アルゼンチン協会『日本アルゼンチン交流史』1990年。

鈴木譲二『日本人出稼ぎ移民』平凡社選書145、1992年。

Federación de asociaciones Nikkei en la Argentina “Historia del Inmigrante japones en la Argentina”（eapañol）Tomo1-Período de Posguerra. 2005.（日本語版）アルゼンチン日本人移民史編纂委員会『アルゼンチン日

本人移民史』（第一巻戦前編、第二巻戦後編）（社）在亜日系人団体連合会、2002年。

若槻康雄『外務省が消した日本人』毎日新聞社、2001年。